

# カブ森、アカマツ林はテーマパーク？！

## —新五カ年計画に寄せて—

静間 純

何事につけ東京中心思考の日本の現状、「里山」と言えばトトロの森のように田んぼ近くに見られる明るい落葉広葉樹の雑木林、気軽に立ち寄れて四季を感じられる場所のイメージが定着しているようです。

福岡に来て出会ったのは見慣れない沢山の常緑樹、冬も青々と茂っている森でした。

ここには常緑広葉樹の里山というものがあつたのです。

里山は樹種を問わず人々が生業や生活の必要性から手を入れ続けてきた場所だったと認識を新たにしました。とは言っても、既に放置されて萌芽木が密生する暗い森に、里山の原風景を見るのはなかなか難しいものがありました。

油山でクヌギ・コナラの森、アカマツの森を育てているというHPを見つけた時には、ここなら慣れ親しんできた明るい里山で保全活動が出来ると早速入会しました。

森会では発足後暫く経った2002年に、半年の間に6回のワークショップ（会員のほかに一般公募の人も参加）を開いて、「20年後の将来像」を描いていました。

その後の保全活動によって、現在ではカブ森についてはほぼその将来像に近づいており、アカマツ林については提示されていた、「老齢林の伐採、更新が必要」という長期保全目標、「アカマツ林の単林を目指す」という中期目標に向かってまさに佳境に入っています。

そして今、森会の里山保全活動は新たなステップを踏み出そうとしています。

2010年から3年に亘って行われた、油山の昔を訪ねる「油山の宝物探し」はなかなか刺激的なプロジェクトで、まさしくその嚆矢となる取り組みでした。

昭和30年代まで里人の生活に大いに利用されていた里山「油山」は、常緑広葉樹の森やアカマツ林、それに萱場とスギ・ヒノキの植林地だった

ということが分りました。集落の周囲には養蚕の為のクワが植えられていたことでしょう。

常緑広葉樹の里山の様子が大分見えてきました。

それを踏まえて2013年にはカブ森、アカマツ林の新五カ年計画が検討され、翌年からそれに基づいた保全作業がスタートしています。

目指すは、カブ森は常緑広葉樹林の中に浮かぶ落葉広葉樹の森、カブトムシが住む天空の（？）里山空間の維持・発展、アカマツ林は昔あつたマツタケの採れる里山空間の復活です。

そして残念ながら油山は本州の里山のようにブライと来られるところではなく、バスや車で来れば入場料ならぬ料金がかかるので、まさしくテーマパークのようです。

大きな方向性としては里山生態系の動植物をありのまま体験できるトトロの森のようなものをテーマにしたいですね。

自然の恵みを楽しむとともに、一方で自然はヒトの為にいつも優しく存在するものではないことを、体験を通して体得してもらえなことこそ、「油山市民の森」「自然観察の森」を計画した時に謳われた「環境教育」でしょう。

そして、里山がどのように利用されていたのかを、木工、草遊び、わら細工、竹細工、ツル細工、炭焼き、カイコを育てるなどといったプログラムを通して伝承していくお手伝いを、センターや他のボランティアグループと共に出来ればいいなあと思っています。

因みに「自然観察の森基本計画」で述べられている計画の目的には、「人々に、自然のしぐみを観察し理解することで、自然、特に動植物とのふれ合い、付き合い方を身につける機会を与え、精神的啓蒙に対して役立つものとする」とあります。

昨年からはまった新しい5ヶ年計画を眺めながら妄想を逞しくしてみました。

